

エルムは、ケンとマヤにも黄色い花の蜜を数滴分けてくれました。花の蜜は甘くてとてもいい香りがしました。マヤは、

「いい香りね、私の好きな香りだわ。」



と言い終わるか終わらないかのうちに花びらに、唇を寄せて蜜を吸い込みました。けれど、ケンにはどうしても好きになれない香りだったので、

「ぼくは止めておくよ。それよりこの森の草花を見てごらん。僕らの街にはない植物がたくさんあるよ！！」

と興奮しながら森の中へと歩いて行きました。

ケンは行く道みちでマヤに話しかけました。しかし、暫くしてマヤからの返事がないことに気づきました。森の中でケンのマヤを呼ぶ声がこだましました。

「マヤ！マヤ～～！」

でも、マヤの姿はどこにも見当たりませんでした。ケンは急に一人になった寂しさが胸に込み上げてきました。

「そうだ、エルム！エルムに聞いたら何か分かるかもしれない。」

そう思いケンは、

「エルム！エルム！」

と叫びました。ケンの声は森じゅうに響きました。すると、エルムの声がかすかに聞こえてきました。ケンは、その声を頼りに森の中を探し歩きました。

すると、見たこともないような数えきれない蝶々の群れに遭遇しました。群れの真ん中にはエルムが居て、その隣には虹色に輝く美しい蝶がいました。ケンはその蝶の美しさに見とれていました。すると、

「どうしたのですか。」

とエルムが聞いてきました。ケンはハッ！と我に返り、

「エルム、実はマヤの姿がどこにも見当たらないんだ。」

と話しかけました。するとエルムはとても落ち着いた声で、

「マヤはあなたの目の前にいるじゃないの。」

と言いました。ケンは自分の目の前を見ました。

「ふざけないでくれよ。マヤの姿なんかどこにもいないじゃないか。」

「ケン。」

とマヤの声がしました。それは、エルムの横に居た美しい虹色に輝く蝶だったのです。

